

新看護プログラムの効果と意識的介入との関係性 —評価表からの一考察—

○竹内 葉子、竹本 修代、秋広 由美子

自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部

【はじめに】

自動車事故対策機構のプロジェクト「生活予後診断に基づいた看護プログラム（以下新看護プログラム）」に取り組み、3年で28例実施した。実施前後でRyogoNursingProgram（以下RNP）評価表を用いている。RNP評価表の結果から検討したことを報告する。

【研究方法】

対象は新看護プログラムを実施し、RNP評価表を用いて評価した26例。RNP評価表の「運動」「認知」「摂食」「排泄」の4項目から「認知」で変化のあった17例はいずれも「運動」に変化がみられたことに着目し、その関連性について検討した。

【結果】

「認知」で変化のあった17例のうち、項目別にみると、覚醒と睡眠、睡眠の質が7例、呼びかけに対する反応が7例、アイコンタクトが2例、表情表出が7例、味覚が3例だった。また、17例中16例で「運動」に、11例で「摂食」に変化があった。

【考察】

新看護プログラムは日常的なケアの組み合わせであるため、効果についての評価が難しい。しかし、プログラムとして意識的に介入し、「認知」の変化を捉えることで観察の視点が変わり、「運動」や「摂食」の僅かな変化を捉えることに繋がると推察する。

「認知」の項目にある覚醒状態が整うことは、多くの刺激を受容しやすくなり、プログラムとして繰り返される介入が刺激に反応しようとする意識への働きかけになる。「認知」の変化はこのプロセスで「運動」「摂食」の変化に繋がったと考える。介入が「認知」の持てる力を引き出すきっかけとなり、「運動」「摂食」の変化を引き出す手がかりと成り得ると考えた。

【結論】

「認知」に着目した介入がプログラムの効果を引き出す要因と成り得る。患者の持てる力に気づくことが生活の再構築に繋がる。